

ヤスパーズ哲学と現代

林 田 新 二

「ヤスパーズと現代」というテーマを「ヤスパーズ哲学と現代」と限定することにするが、この限定されたテーマは、一般的には「現代という時代」にとってヤスパーズ哲学がいかなる意味をもつかという問題であり、或いは「現代の哲学思想」においてヤスパーズ哲学がいかなる位置を占めるかという問題だと解されよう。そしてこの問題は、ヤスパーズ哲学が現代の状況にどのように対処し、哲学者ヤスパーズが現代の哲学思想をどう見たかという問題にも関連するであろう。

「ヤスパーズ哲学と現代」というテーマで一般的に考えられるこれら諸問題の問題性を視野の隅に置きながら、ここでは、このテーマを「ヤスパーズ哲学における現代」という問題に限定し、ヤスパーズの哲学観ないしその基本思想において現代という「時」がいかにして常に本質的に特別の意味をもつことになるのかという問題を考察したいと思う。この問題こそ、ヤスパーズ哲学一般の本質により密接にかかわる問題であり、「ヤスパーズ哲学と現代」というテーマの下で考察さるべき他の諸問題への共通の通路にもなると考えられるからである。

ヤスパーズは、哲学を「永遠の哲学」の理念に参与すべきものと考えているが、しかし同時に、今ここでの人間の在り方や現代という特別の時代状況と不可分のものであらざるをえないと解しており、彼の哲学は本性上、現代ないし「今という時」に特別の意味を認めるものとなっている。

ヤスパーズにとって哲学は、その究極的意義からすれば永遠の哲学 (ewige Philosophie, philosophia perennis) であり、あらゆる「時」を超えた「無時間的なもの」を志向し「描き出す(vergegenwärtigen)」ことだと考えられているし、己れの哲学をもそうした永遠の哲学の一形態だとみなしている。しかし彼は、永遠の哲学ということで、無時間的な哲学の問題に関して超時間的な真理

[第9回大会シンポジウム要旨]

性を主張しうるような教説や思想体系とか、万人に対して永遠に妥当するような哲学とかを主張しているのではない。むしろ反対に、彼の哲学観をも彼の哲学の本性をも、完結した教説等として永遠であるような哲学を徹底的に拒絶していくという明確な姿勢が貫いているのであって、「永遠の哲学」の永遠性は、哲学の問うべき問いの永遠性と、それを問い進むべき人間にとっての課題の永遠性にあると解される。

ヤスパーズにおける永遠の哲学の問題とは、時を超えた存在そのものの探求の問題である。現代哲学においても「古来からそうであったように存在が問題である」し、哲学は「存在とは何かという問いをもって始まる」のである。そしてこの無時間的な存在そのものへの問いは、第一に、現代の状況と今ここという歴史性を負わされて己れ自身のあり方を問わざるをえないような人間によって発せられる問いである。「状況の中で当惑して自己自身に目ざめながら、私は存在への問いを立てる」のである。第二に、哲学が永遠に問うべき存在そのものは、客観的思惟の対象としての存在者を超えたものであるから、それを問う人間もまた、現実世界にあるがままの己れのあり方を超越した意味をもつ可能の実存としての人間でなければならない。二重の意味で、「存在の探求はそれを問う者への問いに投げ返され」ることになり、存在探求の道は「可能の実存からの哲学することである」わけである。そして可能の実存としての人間とは、歴史的規定性を始めとする限界状況の中であって、自己自身のあり方を問いつつ自己にかかわり、そこで己れの超越者にかかわる所に生成する人間である。従って、無時間的な存在そのものの探求は、それぞれの歴史性を負い現代の状況にまき込まれながら自己自身を今ここで現実化しようとする人間によってはじめて遂行されうることになり、哲学の永遠の課題は、全くもって今という特定の「時」に、或いは各人それぞれの現代という「時」に不可分に関連づけられて遂行されることになる。ヤスパーズ哲学にあって、「現代という時」が本性上特別の意義をもつ所以である。

(電気通信大学教授・現専修大学教授)